

説経「さんせう太夫」訓釈（下）——妹の力・安寿のゆくえ

大内 建彦

〔承前——中巻はじまり〕

姉、厨子王に脱走を勧める

コトバ （山椒）太夫は、昨日今日と思っているうちに、はや師走の大晦日になつたが、三

郎を近う寄せて、「やあ、どうだ三郎。あの姉弟の者どもは、これよりもずっと奥の山出しの田舎者だから、正月ということも知らないで、いつも泣き面つらをしているものだから、年がら年中縁起の悪いことこのうえない。あいつら姉弟をば、三の木戸の脇に、柴の小屋を作つて、（そこで）年越しさせろ。三郎どうだ」との、仰おほせ。「承知いたしました」とばかり、（三郎は）三の木戸脇に、（粗末な）柴小屋を作つて、（そこで）年越しをさせる。姉弟のかき口説きの哀れさといつたらない。

フシクドキ ああいたわしや姉弟は、（姉）「何とまあ去年の正月までは、流浪の身とはいいいながら、伊達の郡の信夫の荘で、身分の高い男女の方々が、破魔弓遊びや羽子板遊びと、遊び相手となつて、（我々を）可愛がつて下さつたものを、今年の新年の迎え所といったら、（こんな粗末な）柴小屋で年を取る。（奥州の）我らの国の習いでは、忌みはばれる

者をこそ、別屋べつやに置くとは聞いている。（我々は）忌みきらわれる訳もないのに、これは丹後の国の習わしですか。寒いでしょう厨子王丸。さぞやひもじいことでしょう厨子王丸。ねえ、厨子王丸や。この（山椒）太夫殿では、とても奉公を全うすることなどできません。い。この国の初山入り（蕨入り）は、正月十六日と聞いている。初山にでかけたその折は、姉さんに暇がないなどしなくていいから、そのまま山から逃げなさい。（そして）落ちのびて世間に出て立派になって、姉さんの迎えに来て下さいよ」。

厨子王殿は（このことを）お聞きになって、姉上の口に手を当てて、「ねえねえ、どうしてそんなことを（おつしやる）姉上様。当節の世の中は、壁に耳、岩がものを言うご時勢とか。もしこのことを、太夫一族の者が聞いたらば、さて私の身はどうなることか。逃げたくば、姉上だけでお逃げなさい。さて私めは逃げませんよ」。

姉上はこのことをお聞きになって、「私だけ逃げのびることはたやすいけれど、女に家柄はないのですよ。又あなたは、家伝の系図の巻物をお持ちなのだから、一度はきつと世に出て下さいよ」。いや姉に逃げよ、弟に逃げよ、逃げよ逃げまいと押し問答を、邪険な三郎が、藪で小鳥を狙うように、そつと立ち聞きしておったよ。

コトバ 三郎は太夫の所にやって来て、「おう、どうか太夫殿。（あの）姉弟が互かたみに逃げよ逃げよと押し問答している。こう申している間にも、もはや逃げたかも知れません」と言う。太夫（これを）聞いて、「（二人をここへ）連れて参れ」との仰せ。（三郎は）「承知しました」と申して、（たちまち）三の木戸へと使い走る。

（注）穢れなどを忌んで、一時別居させるための家あるいは小屋。

フシ ああいたわしい姉上様は、「それ言わないことじゃありません。正月三箇日のお祝いの物を、果たしてその通り今いただけるのですね。今は太夫殿が、（私たち姉弟を）譜代下人と呼び使おうとも、昔、伊達の郡信夫の荘で、高貴な男女たちがしたように、正月始めの拝賀の時の式次第の習わしを忘れなさるな」とおっしゃって、姉弟連れ立つて太夫殿のところに行らっしゃる。

コトバ 太夫は大きな眼^{まなこ}をかつぱと見開いて、姉弟をきつと睨みつけ、「おいお前たちは、（わしが）十七貫で買いつて、まだ千分の一も働かせてもないのに、逃げようなどとよくぞ申すよな。逃げようたつて逃がすものか。どんな辺鄙な浦辺にのがれても、（山椒）太夫の譜代下人と呼び使われるように、目印をつけよ。三郎どうだ」との仰せである。

ツメ 邪険なる三郎が、「何か烙印を押そう」とばかり、天上から消し炭を取り出して、広い土間にどうつと移し、矢籠^{やこ}（矢を入れる物）の鏃^{やじり}を取り出して、大団扇^{うちわ}をもって（炭の火を）煽^{あお}ぎたて、おいたわしい姉君の身丈に等しい黒髪を、手にくるくると巻きつけて、（姉君を）膝の下に押さえ込む。

フシ ああおいたわしい厨子王殿は、「ねえ、どうか三郎殿。それは本気が戯れですか。それとも脅しのためになさるのですか。一体全体、その焼き金を、（姉上に）お当てなさったならば、一体命がございましょうか。たとえ命があつたとしても、五人いらつしやる（太夫の子息の）嫁御たちの、月見花見のお供をする時は、あのように器量のよい（姉）姫が、一体どんな過ちを犯して、あの焼き金を当てられたのかと（人が）尋ねるなら、（人は）本人の過ちはとやかく申さないで、（きつと）御主人が非難なされることでしょ

う。(ですから) 姉上に当てようとなさっている焼き金をも、(自分のもの) 二つとも私に
当てなさって、姉上はどうか許してやって下さいよ」。

コトバ 三郎この訳を聞くなり、「なにを言うか、一人一人に当ててこそ、目印になるとい
うもの」と、鍬をまっ赤に焼きあげて、十文字に焼き当てた。厨子王丸は(これを) ご覧
になつて、(いつもは) 大人びていらつしやるが、姉上が焼き金を押されたことに驚いて、
(恐れすくんで) じりじりと逃げられる。三郎この由見てとつて、「全くお前は口ほどにも
ないやつだ。逃げようとしてもそうはいかない」と、髻^{もみぢり}取つて引きもどし、膝の下に押
さえ込んだ。

フシ ああいたわしい姉上様は、自分に当てられた焼き金に手を当てて、「ねえねえ、どう
か三郎殿。何とあなたというお方は、神仏の罰もご利益^{りやく}も恐れぬことをなさいますよ。私
こそ弟に逃げなさいとは申しましたが、弟は太夫殿にとっては、(自分は逃げないと) 良
い教訓を申しました。なに、男の顔の傷は、お金を払つても買い求めるものとは申しま
すが、(その) 傷も傷によります、これは恥辱^{ちじよく}といつてもいい傷ですから、二つでも三つ
でも、私に押し当てて、どうか弟はゆるしてやって下さい」。

コトバ 三郎このことを聞くがはいか、「なにそれぞれ銘々にあててこそ、目印になると
いうもの」と、じりじりつとばかり焼き金を当てる。太夫この有様をご覧になつて、「ど
うだお前たちも、陰口をきいて熱い目にあいたいのか」と、どつとばかり高笑いなさる。
「あのように、いまいまい口をきく者どもは、命にかえても口を割らぬものだ。浜路へ
と連れ下り、八十五人ほどしてやつと持ちあがりそんな松の木の浴槽にとじ込めて、年を

越させよ。食事もやるな。ただ飢え死にさせよ」とのお達しである。(三郎)「承知しました」といって、浜路へと連れおりて、松の木の浴槽の下で、年を取らせる。姉弟が(そのつらい仕打ちに)嘆きかきくどかれるのももつともだ。

フシ ああいたわしい姉上様は、厨子王殿にすがりつき、「ねえ、どうか厨子王丸。私たちの国の習いでは、六月の晦日つごもりに、夏越なごしの祓いで茅の輪をくぐるとは聞いています。これは丹後の国の習俗でしょうか。そうなら、食事もくれず、飢え死にさせようとでもいうのですか。悲しいこと」と。姉は弟にすがりつき、弟は姉に抱きついて、悲しみのあまり涙を流してお泣きになる。

太夫殿、五人いらっしゃる、(子息の)二番目の二郎殿というお方は、大変慈悲深い方でいらっしゃるが、本人が召しあがるご飯を、少しずつお分けなさって、自分の着物の袂にお入れなさり、父・母・兄弟の目を盗んで、夜毎浜路へお下りなさって、松の木湯船の底を割りぬいて、食事をこっそりお与えになった、二郎殿の御恩をば、(姉弟二人は)御礼の言葉にも尽くせぬほどに感謝なさる。

コトバ 太夫は、昨日か今日かと思っているうちに、早正月も十六日になって、三郎を側そばに近づけて、「やあ、どうだ三郎。人の命というものは、脆いようっていて、案外なものでもあるのだぞ。浜路の姉弟の命があるかどうか、見て参れ」とのお言いつけ。(三郎)「承知しました」とばかり、浜路へと下り、松の木湯船をひっくり返して見てみれば、ああいたわしや、お二人姉弟は、土色になっていらっしゃる。太夫の屋敷へと連れてゆきなさるが、太夫はこの様子をご覧になって、「命冥加な者たちだな。ええい山へでも、浜へでも(ど

「うちへでも」ゆけ」とのお達し。

姉上はこれをお聞きになつて「そうでございますか、（なら）山なら山へ、浜なら浜へ、（二人）一緒にやつて下さい」とおっしゃる。太夫はこれをお聞きになつて、「おお、いったい大勢の中には、物笑いの種になる者が、一人くらいいた方がいいものよ。姉だてらに山へゆこうと言うのなら、大童姿のさんばら髪にして山へやれ。三郎どうだ」との仰せ。（三郎）「承知しました」とばかり、ああいたわしや姉上様の、背丈に伸びた黒髪を、手にぐるぐるとひん巻いて、元結い際より、ぶつくり切つて、大童姿にして山へやる。姉第二人の切なる口説きの哀れさといつたらない。

フシ ああいたわしい厨子王殿は、姉上様を先に立て、後からつくづくご覧になつて、「美しい女子の容姿をば、三十二相とは申しますが、姉上様のお姿は、ひときわ増して、四十二相といつてもいいほどの容姿。四十二相のその内で、いの一髪に髪つきのことをいいますが、姉上様には（その）髪もありませんし、自分が後から見てさえも、（何となく）頼りなくみえますので、さぞかし姉上様の落胆のほどが、思いやられて悲しいことよ」とお嘆きになる。

姉上これをお聞きになつて、「栄えてゐる時の髪つき？　こうなつたら（そんな）髪有形などいらぬものだわ。姉第二人連れ立つて、山へゆけることの方がうれしいわ」とある。獣道けものみちをお上りになるが、雪が斑に残まだらつてゐる岩の洞穴に立ち寄つて、膚身はだみにつけたお守りの地藏菩薩を取り出して、岩鼻にお掛けして、「母上様のお仰せには、もとより姉弟の身の上に、もしもの大事のある時は、身代わりにもなつて下さる地藏菩薩と申し上げ

ますが、こうなつてみると、神や仏のお力添えも尽き果てて、お守りくださらないのか、悲しいこと」。厨子王殿は、これを聞き、姉上のお顔をご覧なさつて、「ねえねえ、姉上様。何とまああなたのお顔には、焼き金の跡ありません」と申される。姉上はこのことをお聞きになつて、「まあ本当に、あなたのお顔にも、焼き金の跡はありません」。地藏菩薩の白毫^{びやくごう}どころ（眉間^{みけん}）をご覧になると、姉弟の焼き金を引き取つて、身代りとなつて下さつてゐるではないか。（姉上は）「いったいその焼き金をお取りなされると、あの無慈悲な太夫と三郎が、（焼き金を）きつとまた当てようとするでしょう。痛くも熱くもないように、どうかお戻しになつて下さいよ」。何しろ一度身代わりになつて下さると、もう二度と元にはもどらない。

「それにしても幸せなことですね。これを機会にお逃げなさい。逃げて世間に出て立派になつて、姉の迎えにいらつしやいよ」。厨子王殿は（このことを）お聞きになつて、「一度目の失敗で懲りない者は、二度目には死ぬ目にあうとは、姉上様のことです。逃げたいのなら、姉上だけで逃げて下さい。私は逃げませんよ」。姉上はこのことをお聞きになつて、「さてはこの度の焼き金は、姉のおしゃべりが災いして、当てられたとも思うのですか。そもそもあなたに逃げなさいと申したその時に、はいと承知していたら、どうして焼き金なんぞ当てられていたでしょう。そういうことなら、今日から太夫の屋敷内で、姉がいるとは思ひなされるな。（私も）弟がいるとは思ひません」と言つて、鎌と鎌とを、かちんと打ち合わせ、谷^{（注）}の方へとお下りなされる。

（注） 誓いのため、刀や鐔などを打ちあわせる習わし。

厨子王殿はご覧になって、「何と怒りつばい姉上だな。逃げるとおつしやるなら逃げますよ。どうぞお戻りになって下さい」。姉上はこのことをお聞きになると、「逃げようとするのですか、それがいい。そういうことなら、お別れの杯を交わしましょう」とおつしやるけれど、酒も肴さかなもある筈もない。谷の清水を酒に見たてて、柏の葉をば杯にして、姉上が一口飲んで、厨子王殿に（その杯を）差し出して、「今日は、膚身はなさず身につけているお守りの地藏菩薩も、あなたにお渡しします。もし逃げたとしても、決して浅はかな気持ちにかられてはいけません。浅はかな心はかえつて臆病のあらわれとか言います。逃げのびたその先で、村里（注1）があれば、まずお寺をたずねて、（そこで）出家を願ひ出なさい。出家は頼みがいがあると聞いています。さあ逃げなさい。はやく逃げなさい。あなたを見ているとかえつて心が乱れます。さあさあ、どうか厨子王丸。このように、薄雪の降つた時は、足に履いた草鞋わらじを、後先逆にしっかり履いて、右についた杖を、左の方へもちかえて、上れば下つているように見えます。下れば上つているようにみえます。さあ逃げなさい、早く逃げなさい」と、さらばさらばのお別れは、ほんの少しの間まのことと思つてはいたが、（それが）永遠とわの別れとはなつたとか。

かわいそうな姉上様は、「今日は何とか打ち過ぎたが、明日からは誰を弟と思つて、お話ししましょうか」と、泣いては口説き、口説いては泣いていらつしやるが、こぼれる涙をじ

（注1） 困っている人を何かと救い助けてくれることをいうか？

（注2） 未詳。前後から判断して、「今日までは一緒にいられたが」あるいは「今日は何とかすぎたが」のような意をもつ慣用句か。「まつら長者」にも見える。

つとこらえて、人の刈った柴の梢を拾い取り、（それを）少しの束にして、太夫殿に戻られた。

コトバ 太夫は、正月十六日のこの日のこと、表の櫓（やぐら）にあがり、遠くを物見していたが、姉上の柴束をご覧になって、「さてお前は、弟よりも、よい柴を刈って参ったが、どれ弟はどうか」との仰せ、姉上はこれをお聞きして、「それがでございます。今朝私が、浜へは行かず、山へ行くと申したらば、（弟は）髪を切られた、愚かな姉と一緒に行くよりもと申して、里の山人（山仕事をする人達）たちと、連れ立って出かけましたが、ひよつとして道に踏み迷い、まだ帰って参りませんのでしょうか悲しいこと。私が行って、（弟を）探してきましょう」とおっしゃる。

太夫はこのことをお聞きになって、「おお、それ涙にも五品ある。綿涙、怨涙、感涙、秘涙、と、涙に五つの種類があるが、お前の涙のこぼしうは、弟をば、山からすぐに逃して、顔つきだけの、うれし泣きと見てとった。三郎はどこじゃ。（この女を）責めて白状させろ」とのお達し。

ツメ 邪険なる三郎は、「承知しました」とばかり、十二段ある梯（はし）に（姉の）体（の節々）をくくりつけ、湯責め水責めで口を割らせる。（姉上は）それでも白状しないので、三つ目錐（刃先が三角形のもの）をとり出して、膝の皿を、からりからりと切り揉んで自白せよと責めたてる。もう今は、弟を逃がしたと申そうか、いや申すまいと思うけれど、（姉は）ついに「どうぞ物を言わせて下さい」。

（注）四涙しかない。他に血涙、苦涙、愁涙など多々ある。

コトバ 太夫はこれをお聞きになつて、「物をいわせるためにこそこうしているのだ。物を言うならいつてみる」と申される。

フシ (姉は)「もし今にも弟が、山から戻りましたなら、『姉は弟のために、責め殺された』と申されて、どうか十分に御目をかけて、使つてやつて下さい」。

太夫このことを聞くが早いか「聞きたてることには答えないで、聞きもしないことを言う女めを、口もきけぬほど責めたてろ。三郎よ」とのお仰せ。

ツメ 邪険なる三郎が、天井から木炭すみを取り出して、庭前さきにずつぱと移し、大うちわを持つて(炭の)火を煽ぎたて、ああいたわしい姫君の髻もどりをぐいっと取つて、あつちへ引つ張つては、「それ、熱いだらう、熱けりや白状せよ」とばかり責めたてれば、責め手は強く、責められる身はか弱い。どうしても耐えられようと、正月十六日、日ごろ四つの終り(午前十一時)頃に、十六歳を一生と、(太夫は)姉をばそこで責め殺す。

コトバ 太夫のこのあり様を見てとつて、「脅しのためにやったのに、何とも命のもろい女め。それはそのまま捨てておけ。(弟は)幼い者のことゆえ、よもや遠くへは逃げてはいまい。追つ手をかけい」と言うが早いか、八十五人の手下の者どもを、四方に分けて追いかけさせる。厨子王殿の(逃げた)方角へは、太夫、子息どもが追いかける。

ああいたわしい厨子王殿は、(太夫らが)今や姉上を、打つか叩くたたか苛むさいなか、あとへ戻らうものか、と思われて、あるく峠峠に腰をかけ、あとを振り向きじつとご覧になると、太夫

(注) 未詳。仮名草子『さんせう太夫物語』では「ありく峠」とある。現在の舞鶴市の北部、由良ヶ岳の東南麓のあたりを指すらしいが、地名かそうでないか不明。

を先頭に、後につづくは五人の子息たち。諏訪・八幡よ御示現あれ、とても逃げきれまいと思われて、守刀まもりがたなの紐ひもをととき、太夫の胸もとに突きつけて、(太夫と闘つて)明日はこの世の塵となるならなれ、とお思いなさるが、どうか早まるなよが心、姉上様が、どうか短気をおこさないでと申されたことがあったので、(そのことを思い出し)逃げきれないかも知らないが逃げてみようと思われて、一目散に逃げられるが、(その途中で)里人とはつたりと出合い、「この先に村里はありませんか」とお問いになる。(里人が)「村里ならありますよ、渡し場の村が」、「お寺はありませんか」とお問いになる。「お寺ならあります、国分寺が」、「ご本尊は何でしょう」とお問いになる。(里人は)「毘沙門」と答えた。「何とありがたいことよ。自分が膚にかけた地藏菩薩も、本地を申せば毘沙門です、どうかお力添え下さい」と、一目散にお逃げなさる(そのうちに)、かの国分寺へとお着きになる。

お聖ひじりは、日中の勤行をなさつておられるが、(それを)厨子王はご覧なさつて、「ねえ、どうかご聖人様、後より追っ手にかかつて、絶体絶命の身でございます。どうか匿まして下さい」。お聖これをお聞きになり、「お前のような幼な子が、どんな罪過を犯したからとて、そのようなことを申すのか。言ってみなさい、助けてあげよう」との仰せ。厨子王丸はこれをお聞きなさつて、「命があつての物語。どうかまず身を匿まして下さい」とのご返答。

お聖はこれをお聞きなさつて、「何とお前は、もつともなことを申す者よ」と、寝所から、古い皮行李こうりを取り出して、その中へ(厨子王を)どうと押し込み、縄を縦横にぐいっ

とかけて、棟の垂木たるに吊し上げて、何知らぬ顔で、日中の勤行に励んでおられます。

何しろ正月十六日のことなので、雪道の跡を辿って、国分寺へと追っかける。太夫は表の楼門で番をする。五人の子息どもはお聖のところへ参り、「おたのみ申すお聖、ただ今ここへ童一人入りました。どうぞお出し下さい」と申される。お聖これをお聞きになって、耳が遠くはないけれど（とぼけなさって）、「何といわれる。春の夜が退屈さくだから、お齋日さいにちのお布施ふせに参れとでもおっしゃるのか」。三郎（これを）聞いて、「何とお聖は、川でおぼれ死んだ人間が杭にかかった様な（食いにかかったらテコでも動かぬ）お聖かな、齋のお布施はその後のこと。まずは童をお出し下さい」とかつかする。ご聖人は「やつと分かりました。この坊主に童を出せとのお申しか。自分は百日の仏事に熱中しておった。童やら、盗賊やら、そんなものの番はせぬ」との仰せ。

ツメ（三郎）「何とも憎つくきお聖の言葉よ。ならば寺中を捜させますよ」と申されると、（お聖）「結構よ」と申される。身の軽い三郎が、捜すべき所はどこぞだぞと、本堂、長押ながし、庫裏、寝所、仏壇、縁の下、築地垣の下と、天井板はずして捜しはするが、童の姿はどこにも見あたらない。

コトバ（三郎）「何ともおかしなことよ。裏口へも門口へもゆきようがないのに、童がないのはいかにもあやしい。どうあれお聖がこっそり隠しておられることはわかり切っている。童をお出しあれ。（童はいないと）お出しなさらないで、過分の大誓文をお立てなさるなら、由良の港へ戻ろう」との仰せ。

ツメ お聖は「童のことなど知らないが、誓文を立てよとならば立て申そう。そもそも私め

この法師は、この（丹後）国の者でもない。国を申せば大和の国、宇陀の郡の者ですが、七歳の時に播磨の国の書写山へ上り、十歳にして髪を剃り（仏門に入り）、二十歳で（説法のため）高座へ上り（二人前の僧となり）、幼少より、習い納めてきた御経を、たった今誓文に立て申そう。そもそもお経のいろいろ、華嚴に阿含・方等・般若・法華に涅槃、並びに五部の大藏経・薬師経・観音経・地藏お経、阿弥陀お経に、小文に古経は、全てで、七千余巻に記されてある。万余の罪の滅する経が、けつぽん血盆経・浄土の三部お経、俱舎の経が三十巻、天台が六十巻、大般若が六百巻、それ法華経が一部八巻二十八品、文字の流れが六万九千三百八十四字に記されている。（もし偽るなら）この御罰を、厚く深く受けるでしょう。（仏に誓って）子供のことは知りません」。

太夫このことを聞くが早いか、「のう、お聖人様よ。それ誓文などというものは、日本国の上界下界の大小の神々を神降ろして、（その神を）驚かしてこそ、誓文などがありがたがるものだ。今のはお聖の、幼少より習い納めた、檀那（お布施する人）だましの経尽しというものではあるまいか。（どうぞ）ただ誓文をお立てになれ」とぞ責めたてる。

クドキ ああいたわしいお聖人様は、今立てたばかりの誓文でさえも、出家の身として、どれほどか気の進まぬ思いをしたのに、又立てよとはすげないことよ。今はもう童を出してしまおうか。又誓文を立てようか、どうしよう。今童を出したなら、殺生戒を破ることになる。又童を隠したままで、誓文を立てれば、妄語戒を破ることになる。ええい、破るなら破ってしまえ妄語戒。しかし殺生戒だけは破るまいと思われて、「のう、どうか太夫・三郎殿、立て申しましょう。どうぞご安心あれ太夫殿」。

ツメ お聖は口を嗽^{すす}いで身を清め、湯垢離七度・水垢離七度・潮垢離七度、二十一度の垢離をとり、護摩の檀を飾られる。矜羯羅童子・制吒迦童子、俱利迦羅不動明王（不動明王が龍王として現れ、岩の上に立つて、劍に巻きついた黒龍が劍を呑み、火炎に包まれている姿）の、劍を呑んだところの圖像をば、まづ逆様にお掛けになる。寢所より、紙を一帖とり出して、十二本の御幣を切つて作り、護摩の檀に立てられたのは、ただの誓文ではなくて、太夫を調伏せするための修法^{ずほう}とお見うけた。「敬つて申し上げます」。独鉗^{うちづか}を握つて鈴を振り（密教で悪魔や煩惱を破砕するための法具）、苛高^{いらだか}（粒が大きく珠が平たくて角の高い）の数珠をさらりさらりと押し揉んで、「謹上散供（散米の供物）再拜再拜。上には梵天帝釈、下には四天王・閻魔法王・五道の冥官、大紙に泰山府君。下界の地には、伊勢は明神天照大神、外宮の四十末社、内宮の八十末社、両宮合わせて百二十末社の御神、たった今降ろし奉る。^{（注1）}

熊野には新宮・本宮、那智に飛瀧^{ひとう}権現、神の倉には重蔵権現、（那智の）滝本に千手觀音、初瀬には十一面觀音、吉野に藏王権現、子守・勝手^{てがひごず}の大明神、大和に鏡作・笛吹^{ふえふき}の大明神、奈良は七堂大伽藍、春日は四社の大明神、^{（注2）}転害牛頭天王、若宮八幡大菩薩、下つ河原・加茂つ河原・たちうち・べつつい・石清水、八幡には正八幡、西の岡には向日の明神、山崎には宝寺、宇治に神明、伏見には御香^{ごこう}の宮、藤の森の大明神、稻荷は五社の御神、祇園には八大天王、吉田は四社の大明神、御霊八社、今宮三社の御神、北野殿は南無天満天

（注1）このあたりの神仏関係の注釈等はすべて『説経集』（新潮日本古典集成）などに譲る。

（注2）諸注釈とも未詳。

神、梅の宮、松の尾七社の大明神、高きお山に地藏権現、麓には三国一の釈迦如来、鞍馬の毘沙門、貴船の明神・賀茂の明神、比叡の山には伝教大師、麓に山王二十一社、打下には白髭の大明神、琵琶湖の上には竹生島の弁才天、お多賀八幡大菩薩、美濃の国には長屋の天王、尾張には島津・熱田の明神。

坂東の国には、鹿島・香取・浮洲の明神、出羽に羽黒の権現、越中には立山、加賀には白山、敷地の天神、能登の国には伊須流岐の大明神、信濃の国には戸隠の明神、越前には御霊の御神、若狭には小浜の八幡、丹後には切戸の文殊、丹波には大原八王子、津の国には降り神の天神、河内の国には恩地、枚岡、誉田の八幡、天王寺には聖徳太子、住吉四社の大明神、堺には三の村、大鳥五社の大明神、高野に弘法大師、根来には覚鑊上人、淡路島には、論鶴羽の権現、備中に吉備の宮、備前にも吉備の宮、備後にも吉備の宮、三が国の守護神を、ただ今ここに降ろし、神の眠りを覚ませ申す。

さて筑紫の地に入りては、おさらかに四こくほてん、鵜戸・霧島、伊予の国には一宮、ぼだいさん、滝の宮の大明神。総じて神の総政所、出雲の大社、神の父は佐陀の宮、神の母が田中の御前、山の神が三十五王、いわんや梵天・鬼魅・樹神・屋の内に、地神荒神・三宝荒神・八大荒神、電、七十二社の家の御神に至るまで、ことごとく誓文にお立っています。

恐れ多くも、神の数九万八千七社の御神、仏の数が一万三千仏、(偽るにおいては)この神罰を、厚く深く受けましょう。自分自身は言うまでもない。一家一門、すべての親族

(注) 未詳。「宇佐・羅漢・四国補天」か。

に至るまで、墮罪の車（罪を犯したことの刑罰）に誅せられ、修羅三惡道（地獄・餓鬼・畜生）の迷界へと引き落とされ、世に再び戻るなどないでしょう。童のことは知りません」。

（以上、中巻）

コトバ 太夫はこれをお聞きになって、「殊勝なことよのお聖。明日からでも、齋とぎの施主になってあげましょうぞ」との仰せ。三郎これを聞くが早いが、「のう、どうでしょう太夫殿、ここに不思議なことが一つあります。ほれ、あすここに吊つてある皮籠かわごは古いものだが、掛けたる縄が新しい。風も吹いてはいないのに一揺れ二揺れ、ゆらゆらと揺れ動いたが、まことに不思議。あれを調べないで、戻るならば、きつと年がら年中悔いや怨みの熱ほとほりの種となりましょう。お戻り下さい太夫殿」。

フシ 兄の太郎はこれ聞き、「やあ、三郎よ。父は老いぼれたにしても、おぬしは老いぼれてはいまい。このような古寺には、古い経や仏の、がらくたの不要なものを、いらないで吊つてあるものよ。昨日吊ることもあろうし、又今日吊ることもあろう。外は風が吹いていなくても、屋鳴りする上に、こだまの響きが重なつて、内にも風が吹くものよ。たといあの皮籠の中にあるのが、童であるにしても、たつた今お聖の誓文を聴聞したからは、（童の）使いようもないぞ。あの童でなければ、太夫の屋敷内に、その者を使う者もないという（無用の）身の上の者か。まずこの度は、俺に免じてさあ戻れ」。

コトバ 三郎このことを聞くが早いが、「太郎殿のご意見、聞くもよし、又聞かぬもよし。生半可な道心ぶつたことを申されるよ。そこをおのき下さい」と言うや否や、刀の鞘をは

ずして、吊つてある縄を切り、（籠を）降ろしつつ、宙で要所を引っ張つて、「（きつと）童がいるぞ」と喜んだ。下へ降ろす間もどかしく、（籠の）縄を縦横にぶつつり切つて、蓋を開けてご覧になると、（厨子王）の膚の守りの地藏菩薩が、燦然と金色の光を放ち、その光が三郎の両眼に霧のごとく降りそそぎ、（三郎は）縁から下へころげ落ちる。

太郎はこれをご覧になって、「だからいわんこつちやない。（仏が）即座に命をお取りにならないのは、お前の幸運というもののよ。もとのように吊つておけ」と、縄を縦横にぐいっとかけて、元のように吊り掛けて、三郎は兄弟たちの肩に寄りかかり、由良の港へ戻られたのは、ただただ面目ない体と見えたことであつた。

フシ ああいたわしいご聖人様は、今も皮籠を降ろすところを見ていたが、皮籠を降ろすとなれば、（見つかつて）童を引き連れてゆくことはきまりきっている。童を連れてゆくのなら、さてこの聖にも、縄をかけよと申そうと思つたが、（それにしても）皮籠の中の童は神仏の方便、神通力をもつ者か。

（その後）皮籠の下へ立ち寄つて、「童よいるか」とお問いになる。厨子王殿は弱つた声をして、「童はここにおりますが、もう太夫の一族は、辺りにおりませんか」。お聖これをお聞きになつて、「安心なさい」と、皮籠を降ろし、蓋を開けてご覧になると、ああもつたいない、地藏菩薩は、金色の光を放つておられます。

（厨子王は）皮籠の中から跳んで出て、お聖人様にすがりつき、「ねえねえ、どうかご聖人様。名乗るまいと思つていましたが、今は名乗り申します。私を誰とお思ひになりますか。奥州五十四郡の主、岩城判官正氏殿の長男で、厨子王丸とは私のことです。さて思わ

ぬ訴えのため、都へ上り、朝廷に安堵の御判を申し受けるために上京しようとして、越後の国の直江の津から売られはじめて、あちらこちらと売られたあげく、あの太夫に買われ、刈ったこともない柴を刈り、汲んだこともない潮を汲み、その仕事ができなくて、（自分は）ここまで逃げてきましたが、又太夫の屋敷内に姉が一人おりまして、（その姉が）もし都への道筋を尋ねることがありましたら、どうか教えてやって下さいお聖人様。私は早く都へ逃げのびとうございます。

お聖これをお聞きになつて、「何ともあじけない厨子王よ。あの太夫が多くの手下どもを、五里も三里も先へ（やつてすでに）追つ手を遣していることでしょうよ。本当に逃げのびたいのなら、いっそのこと、私が送り届けてあげよう」と、元の皮籠へ念入りに入れて、縄を縦横にぐいっとかけて、お聖は、背中にそつと負い、その上を古衣でくるんで、「町中であるいは関の番小屋で、『聖の背中の中のは何か』と、人の問う時は、『これは丹後の国の国分寺の金焼地蔵でございますが、余りに古びましたので、都へ上り、仏師に彩色してもらうために上ります』とでも言えば、さして咎める者もあるまい」と、丹後の国を出て立つて、菟原、^(註)細見はこととかや。鎌谷・井尻を打ち過ぎて、くない・桑田はこととかや。口郡^{くちごり}とも知られたる、花に浮き木の亀山や。年は寄らねど老の坂、沓掛峠を打ち過ぎて、桂川を打ち渡り、川勝寺、八町畷を打ち過ぎて、お急ぎあれば程もなく、都の西に知られたる、西の七条朱雀、権現堂にもうお着きになる。

コトバ 権現堂にも付いたので、皮籠を降ろし、蓋を開けてご覧になると、皮籠の中が窮屈（注）以下、道中の地名をおり込んでの道行表現。地名に未詳のことが多い。

であったのか、はたまた凍傷にでもかかったのか、（厨子王丸は）腰が立てずにいらっしやるので、お聖これをご覧になって、「童に代わって自分が都へ参って、安堵の御判を申し受けてやりたくは思うが、出家の身の上ではそうもできないこと。それではここでおいとま申す」との仰せ。

フシ ああいたわしい厨子王殿は、「命の恩人のお聖人様は、丹後の国へお戻りになるか、うらやましいな。つらいと思うのも丹後の国。姉上一人でいらっしやるので、又恋しいのも丹後の地。命の恩人のお聖人様に、何か形見を進ぜましょう。地藏菩薩を進ぜましょうか。守り刀を進ぜましょうか」。

お聖これをお聞きになって、「さてこの度の命をば、この聖めが助けたとお思いなさるのか。（それは）膚の守りの地藏菩薩が、お助け下さったのだよ。篤く信じてお掛けなされよ。一体侍とかいう者は、守り刀をば、七歳からもう差すと聞いています。出家の身の上には、髪剃以外に刀物など要りません。真実形見として賜りたいのは、どうぞ鬢の髪をくださいよ。聖の方の形見には衣の片袖をさし上げよう」とて、鬢を一房を切ってお取りになり、衣の片袖をお与えになって、お聖は涙とともに、丹後の国へとお戻りになる。

コトバ ああいたわしい厨子王殿は、朱雀権現堂にいらっしやるが、朱雀七村の子供どもは集まって、「さあ守り養育申そう」と、一日二日は養育するが、つづけてそうする者もないので、「さあみんなで土車を作って、洛中へと引いていってあげよう」とて、都城へと引いてゆく。

都は広いというけれど、五日十日は養育するが、つづけてそうする者もない。「ではさ

あこれより、四天王寺へ引いていつてあげよう」と、宿駅うまやから宿駅へ、村から村へ送つて、四天王寺へと引いていった。

ああいたわしい厨子王殿は、(四天王寺の)石の鳥居に取りついて、「えいやつ」と言つてお立ちなされると、御太子(聖徳太子)様のお計らいか、はたまた厨子王殿の御果報やらか、腰がお立ちなさったよ。

丁度その折御太子の守をなされる、阿闍梨大師がお通りなさったが(大師は)厨子王をご覧になつて、「そこにいる若侍は、遁世望みか、はたまた奉公望みか」とお問いなさる。厨子王殿はこれを聞き、「奉公望み」と申される。阿闍梨大師はお聞きになり、「自分の屋敷内には、百人の稚児・若衆を置いている。その古袴を身に着けて、お茶の給仕なりなされるか」との仰せなり。「致します」と申される。阿闍梨大師にお伴なさり、稚児たちの古袴を着けられて、声訛なまりの茶坊主、あちらへこちらへと呼ばれて、篤く寵愛されていらつしやる。

以上は厨子王の物語、(それは)さておき、花の都におられる、(帝の)三十六人の臣下大臣の御仲間で、梅津の院と申すお方は、男子も女子も、行く末の継とりがいらつしやるなくて、清水の観音へお参りし、どうか申し子をとお願いなさったところ、清水の観音は、本殿の内陣よりゆるめるとお出でなさつて、枕元にお立ちになる。(そして)「梅津の院の養子は、これより四天王寺へ参詣なされよ」とのお告げがある。「ああありがたいことよ」と、梅津のお屋敷にお帰りになつて、お喜びになること限りがない。三日後に、四天王寺参りにいらつしやるとのこと。

ツメ 阿闍梨大師はこれをお聞きになつて、「都の梅津の院がここへお参りだと承つてゐる。そうなら座敷を飾つておこう」と、天井を綾・錦・金欄でお飾りになる。柱を豹・虎の皮で包ませる。高麗縁の畳を千畳ばかりお敷きになる。座敷に掛けられた本尊は、当時都で流行した、牧谿和尚の墨絵の、観音・釈迦・達磨、三幅一対が掛けられる。花瓶に生けられた花は、天上天下唯我独尊を（真の花の心として）見立てられる。百人の稚児・若衆も、はなやかに飾りたて、今か今かとお待ちなさる。

コトバ 三日たつて、四天王寺へご参詣なさるが、「何と風流な花の景色よ」と、座敷の正面にお通りなされて、百人の稚児・若衆を、上座から下座へ、三遍もくり返しご覧なさるが、養子になるべき稚児はいない。

梅津の院はご覧なされて、はるかな下座にいらつしやる、厨子王殿の額には、米という字が三つあり、両眼に瞳が二つずつあるのを、しかとご覧になつて、「自分の養子に、あの茶坊主を、私にくだされ」との仰せなり。

百人の稚児・若衆はこれをご覧なされて、「何と都の梅津の院は、目も利かぬことを申されることよ。昨日今日に、土車に乗つて乞食していた、卑しき茶坊主を、梅津の院の養子になんぞとおっしゃるとは」と、一同一度にどつとお笑いなさる。

梅津の院はこれをお聞きになつて、「私の養子をお笑いになるのか」と、（厨子王を）湯殿へと下がらせ、湯風呂に御身を清めさせなされて、膚には青地の錦を着けさせ、絞り染めの直垂ひたれの上に、黄染めの水干、それに玉の冠をお着けになつて、一段高く、梅津の院の左の座敷に、正座なさっている姿は、百人の稚児の中に、匹敵する者など二人といない。

梅津のお屋敷に帰られて、山海の珍味に土地の果物をご馳走^{ちそう}として調えなさり、（養子を迎えられた）お喜びは限りもない。梅津の院の御代行として、帝の大番役に、厨子王殿を任せられる。三十六人の臣下大臣はこれをご覧になって、「梅津の院の養子であろうとなかろうとかまわぬ。卑しき者は、我々と同席することは許されまい」として、（厨子王を）座っていた座敷から追いたてる。

フシ ああいたわしい厨子王殿は、今はもう名乗り出ようか、今名乗れば、父岩城殿の御面目に、又名乗り出なかったならば、養父の御面目に（かかわる）、父の面目をたてる前に、まず養父の威光をあげよう、とお思いになって、膚の守りの、志太・玉造の系図の巻物を取り出して、扇に供え、はるか上座に持つてあがり、自分は（広庭の）白州へと跳んで降り、玉の冠を地にすりつけて、（帝に向って）丁寧にお辞儀し拝される。

ツメ 上座の中でも二条の大納言、この巻物を取り上げて、高らかにお読みになる。「そもそも奥州の国、日の本の將軍、岩城の判官正氏の総領、厨子王判」とぞ読んだことよ。

コトバ 帝これをご覧になって、「これまででは、どこの誰かと思っていたが、岩城の判官正氏の総領、厨子王か。長々の浪人、とりわけ不憫である。奥州五十四郡は、元の本領として返しおく。日向の国は馬を飼う費用として与える」と、薄墨紙の御綸旨をお下しくださる。

厨子王殿はお聞きになり、今申そうか、いや申すまいと思ったが、今申さないで、いつの御代に申せばよいか。（厨子王）「奥州五十四郡・日向の国も望みません。考えるところがありますので、丹後五郡に相換えてお与え下さい」と申しなさる。

帝これをお聞きになつて、「何、大国の代りに小国を望むのは、深い子細があつてのことと思う」と（帝）「丹後の国も馬の飼料として与えよう」と、重ねて御綸旨を賜つた。三十六人の臣下大臣はこれをご覧になつて、「さて今までは、どこのだなたかと思つておりましたが、厨子王殿でござりましたか。我々は（このように）向かいあつて座につくことは許されまい」と、座敷から逃げるように退席なさる。厨子王殿は、梅津のお屋敷にお戻りなさつて、喜ばれること限りがない。

フシ ああいたわしい厨子王殿は、かき口説かれることこそ哀れである。「私は今一度いいから鳥になりたいよ、羽が欲しいよ。（今すぐ）丹後の国へ飛んでゆき、姉上様の、潮を及んでいらつしやる、着物の袂にすがりつき、出世できたその理由を語りたい。蝦夷が島へも飛んでゆき、そして母上様に捜し会い、出世したその理由を話したい。筑紫の安楽寺へも飛んでゆき、父岩城殿に訪ね会つて、出世した理由を話したい」。

いつまで待つてよいものでもない。帝へこの由を願ひ出て、安堵の御判をいただいて、筑紫の安楽寺へと（父を）迎^{むか}えの興^{きよう}をさし向けなさる。そしてその後、丹後の国へ着任せんとおっしゃつて、三日先の宿札を、丹後の国の国分寺の、寺の御門にお立てさせなさる。

コトバ お聖これをご覧になつて、丹後の国はほんの小国とはいつても、広い堂や寺もあるのに、こんな古びたお寺に、都の国司が、宿札をお立てなされたのは、聖一身上の一大事と思ひなかつて、それ「出家」と書いて、家を出るとは読みましょう。（その言葉どおり）傘一本かついで、どこへともなく逃げてゆかれる。

（厨子王は都から）はや三日目に、丹後の国の国分寺にお着きになる。村人を近くに呼んで、「のうお前たち、この寺に堂守りはいないのか」とお尋ねなさる。村人答えて申すには、「おられます、この度のことがあるまで、尊き僧侶が一人おられました、国司が宿札をお立てになったのは、聖の身の上の一大事と思われて、どこへともなく立ち去られた」と言う。「ならば捜して（ここへ）つれて参れ」との仰せ。「承知しました」と言つて、丹波の穴太より捜し出し、厳しく縄で縛り上げて、国分寺へと引き立てる。

厨子王はこれをご覧になって、「命の恩人のお聖に、どうして縄をかけたりするのだ。解いてゆるせ」とのお言葉。聖これをお聞きになって、「これまで都の国司に、命を助けたことなどない。そのように出家の身の上の者をからかうものではない。どうぞ早く、命を召されよ」。

厨子王はこれをお聞きになって、「まことにその通り、そういうのも無理はない。この私を一体誰だと思ふのか。皮籠の中の董なのだよ。都の七条朱雀まで、送ってくれたその時に、取りかわした形見として、衣の片袖がここにある。（そなたの持っている）鬢の髪房をどうか見せてくれ」。聖はこれをお聞きになって、「まだほんの百日もたたぬ間に、出世なされて目出たいこと。黄金が朽ちないように侍の名も朽ちぬとは、このことを言うのだろう」と、喜ばれること限りがない。

厨子王丸の仰っしゃることには、「由良の港に残していった、姉上はこの世におられるか」。聖はこれをお聞きになって、「いや、そのことですが、姉上様は、あなた様を逃した咎めだてとかで、邪険なる三郎が、ついに責め殺してしまいました。捨ててあつ

た亡き骸^{がら}を引き取つて、私めが火葬をし、（これが）そのお骨と遺髪」と、涙とともに取り出して、厨子王殿にお渡しなさる。厨子王はこれをご覧になって、「これは夢は現^{うつ}かよ。それでは私がこの度、出世した甲斐もへちまもないではないか」と、お骨と遺髪を顔にあって、涙を流し思い焦^こがれてお泣きになる。

いつまでもそのままにしておけないので、山椒太夫を召し出して、重罪に処せんと、由良の港へ使者を遣わされる。太夫は呼び出しを聞くが早いか、五人の息子どもを近う寄せて、「なあ、どうじゃお前たち。わしは、この国に長らく住んでいる者だから、きつと名所、旧跡をお尋ねになるにちがいない。その時はわしが御前にまかり出て、一々これこれと申し上げよう。きつとその折は所領を下さるにちがいない。のう三郎。所領をいただくとあらば、小国を望んではいけないぞ。太夫には子孫も大勢いることだから、大国を下さるように望むのだよ。決して決して忘れるでないぞ」と、五人の息子たちに手を引かれて、国分寺へと参られる。

厨子王はご覧になって、「さてさて太夫よ、ようこそ早く参つたな。この私を誰だか知つておるか」との仰せ。「いかにも、都の国司と敬い申しております」とおっしゃる。厨子王殿はお聞きになって、「さてお前の屋敷内には、よき下女を抱えておると聞く。この私をその召使い女の婿に取つて、富も地位もある立派な家として栄えようぞ」。

太夫は三郎の方をきつと見て、「いかにもまことに伊達郡信夫荘の者で、姉にしのぶ、弟に忘れ草といつて、姉弟がおりましたが、姉のしのぶは、容姿もなかなか良かったものを、殺さないでおいたなら、都の国司を婿殿に取つて、富貴の家として栄えられたものを」

と後悔する。

厨子王殿はこれをお聞きになり、隠そうとするが隠しきれず、太夫の前に身を乗り出し、「なあ、どうだお前たち。姉のしのぶをば、どんな罪過があるからと責め殺したりしたのか。私をば誰だと思うか。お前の屋敷内にかつていた、忘れ草とは私のことだ。姉上を返せ。太夫、三郎よ。さてもお前たちは、死んだ姉を返せというのを、無理なことと思うだろうが、あの三荷の柴さえ刈ることが出来なくて、木樵りたちが哀れんで、刈ってくれた柴束を、きれいに揃っているのが罪だといって、三荷の柴に七荷増して、十荷刈れと責めたのは、これは無理なことではなかったか。

さて私は、つまらぬことを申したものだ。恨みに対して仕返しをすれば、燃えあがる火に、油をそそぐようなもの。恨みを慈悲で報ゆれば、これは仏と同格だ。どうだ太夫。大國が欲しいか、小國が欲しいか、望みどおりに取らせよう。太夫よどうだ」との仰せ。

太夫につこりとばかり笑って、三郎の方をきつと見やる。三郎答えて申すには、「そうでございますか。太夫は子孫の多い者でもございますので、小國では意に叶いません。どうぞ大國をいただきたい」と申される。

厨子王殿はこれをお聞きになり、「何と抜け目なく望んだものよ三郎よ。太夫が小國を望もうと、是非とも大國を取らすつもりだが。（望むが）幸い太夫には、広い黄泉の國（死後の世界）を取らせよう」とのお達し。（役人は）「承知しました」と言って、太夫を捕えて引き立て、国分寺の広庭に、五尺ほど穴を掘って、肩から下を土中に埋め、竹鋸をこしらえて、「決してほかの人間に引かせるな。息子どもに引かせて、つらく悲しい定め

を見せよ」とのお達し。(役人たちは)「承知しました」と申して、(太夫の)肩より下を土中に埋め、まず兄の太郎に、鋸が渡される。「太郎には思うところがあるので、鋸は許せ」との仰せ。

次に二郎に鋸が渡される。二郎は鋸を受けとって、(太夫の)後の方へ回って、口説かれることこそ哀れである。「昔から今の今まで、子が親の首を(鋸で)引くなどとは、聞いたこともないゆきよ。私が申したこと、ちよつとでも間違つたことを申しておりますか。都から遠く離れた所に住む者でも、情けをかけてお使いなさいと、折につけ申したのもこのことです。(国司がその無慈悲を憎んで)お引かせになるのはもつともです」と、涙にむせんで、引きかねていると、「いかにもまことに、二郎についても思うところがあるので、鋸を許せ」とのお言葉。

三郎に鋸が渡る。邪険なる三郎は、この鋸を奪い取って、「卑怯よの誰も彼も。自分の罪は棚にあげて、我らの罪咎^{とが}とおつしやるのなら、のう、どうです太夫殿、生涯唱えた念仏を、いつ役にお立てなさるか。この度のお役にお立てなされ。冥土への旅の三途^{さんず}の河を、この三郎が背負い越させて進ぜよう。一引き引いては千僧供養(千人の僧による供養)、二引き引いては万僧供養。えいこらえい」と引くうちに、百に余りて六つ(百六回)目に、首をば前に引き落とす。

さてその後で、三郎をやすみ(地名らしいが未詳)の小浜に連れてゆき、往來の木樵りたちに、七日七夜首を引かせ、さてその後で、二郎、太郎を御前に召され、(厨子王)「昔から伝え聞いているが、苦い蔓には苦い実がなる。甘い蔓には甘い実がなるとは聞いてい

るが、お前たち兄弟は、苦い蔓に甘い実のなったような者どもよな。まず兄の太郎に、鋸を許すこと、特別の詳しい事情があつてのことではない。（私が）皮籠の中に居る時、『あの童でなければ、太夫の屋敷内でその人を使う者もないという身の上の者かだ、我に免じてともかく戻れ』と言つた、その言葉ひと言によつて、鋸を許してやつたのだ。また、二郎に鋸を許したのは、これも特別の深い事情があつてのことではない。（伏せられた）松の木湯船のその下で、空しく年を取らせたその折に、夜毎浜路を下つて、食事を運んでくれた、二郎殿の御恩を、湯の底水の底まで（心底）報いがたく思つたらばこそだ。丹後は八百八町と申すが、（そのうち）四百四町をば分けて、兄の太郎に与えよう。（ところが）太郎は剃髪し、国分寺に落ちついて、姉上の菩提を弔い、又、父太夫の死後の供養をする。「残る四百四町をば、二郎殿に一括して一式総政所（所領の事務方の総元締）に任命する」と申される。（それが元で）ずっと古いご時世より丹後の国の地頭をば、一色氏と申すようになった。そして又お聖様を、命の恩人の親とされ、同じ太夫の屋敷内で召し使われている、伊勢の小萩という娘を、姉上となさつて、（そのお二人を）網代の輿にお乗せして、都へお上りなさいます。

そして何よりも厨子王殿は、蝦夷が島へといらっしゃつて、母上の行方をお捜しになる。いたわしい母上は、明けては厨子王恋しや、暮れては安寿の姫を恋しやと、明けても暮れても嘆き悲しまれるその余り、両眼を泣きつぶして（盲いて）いらっしゃる。千丈もある畑にいらっしゃり、粟を求めてやつてくる鳥を追つていらっしゃる。取りおどしの鳴子（なるこ）のついた手縄にすがりつき、「厨子王恋しや、ほうやれ。安寿姫恋しや。うわたき恋しや、

ほうやれ」と言つては、どうと身を投げる。

厨子王殿はご覧になって、「何とも不思議な、鳥の追いようかな。もう一度追いなさい。領地を与えてやろう」。母上これをお聞きになつて、「ねえ、どうして領地までいりましようか。ここですくして稼いでおりますのに。追えとおっしゃるなら追いましよう。と、鳴子の手縄にしがみつきの、「厨子王恋しや、ほうやれ。うわたき恋しや、ほうやれ。安寿の姫が恋しや」と言つては、どうと身を投げる。

厨子王殿はご覧になって、「これはきつと、母上様にちがいない」と、母上に抱きつき、「ねえどうか、私は厨子王丸でございますが、出世して、ここまで参りました、母上様」とおっしゃられる。母上このことをお聞きになり、「そうでございますよ私めは、姉に安寿姫、弟に厨子王丸といつて、姉弟二人の子供がいましたが、ここよりずっと奥の方へ売られてゆき、行方知れずと聞いています。このように目の見えぬ者はだまされないものです。盲人が杖で人を打つても咎めだてはありません」とばかり、辺りのものを追い払つていらつしやる。

厨子王殿はお聞きになつて、「全く無理もない、ごもつともです。ああ思ひ出しました」といつて、膚の守りの地藏菩薩を取り出して、母上の両眼にお当てになつて、「きつと、いいことが起りますように。きつと、盲が癒りますように」と、三度そつと撫でさすられると、瞋れて久しい両眼が、ぱつとあいて、鈴のようにぱつちりとしている。

母上はこれをご覧になつて、「何とあなたは厨子王丸よ。安寿の姫は」と尋ねなさる。厨子王殿はお聞きになり、「そのことでございます。越後の国直江の浦から売り分けられ

て、（私たち姉弟は）あっちこっちと売られたあげく、丹後の国由良の港の、山椒太夫に買いとられ、汲んだこともない潮を汲み、刈ったこともない柴を刈り、その仕事をつづけることができなくて、私が逃げたその後で、安寿姫を責め殺してあつたのを、私が出世して、敵を討ち、ここまで尋ねて参りました。母上様」とお話しなさる。

母上はこれをお聞きになって、「あなたは出世して、目出たいが、何と私は、若木（安寿）を先立たせ、老蔓（自分）があとに残るよ、悲しいこと。ままよそれも仕方がない」と、玉の輿にお乗りになって、国へお帰りあそばされた。

そしてその後、越後の国直江の浦へいらつしやって、初めに売った山岡太夫を、簀巻きにして水中に投げうってしまった。（山岡太夫の）女房の行方をお捜しになった。女房はすでに死んだと言う。ままよ、仕方がないと、柏崎にお渡りになって、（そこに）なかの道場という寺を建て、うわたきの女房の菩提をお弔いなさった。

さてそこより厨子王殿は、母上の御供をなさりつつ、都をさしてお上りになる。梅津のお屋敷にお入りなされると、梅津の院もお出迎えになり、母上とご対面なされ、「何とまあい出たきこと」と、御喜びも限らない。

そうしたことはさておき岩城殿は、厨子王が出世なさったことで、帝が勅勘（勅命による勘当）をお許しになって、都に上らせなされると同時に、（梅津の）お屋敷へと移らせなさいましたので、御台所も厨子王丸も、お出迎えなさるとともに、思わず我を忘れて抱きつき、（言葉にならず）ただこれはこれはいい合うのみ。うれしいにつけ悲しいにつけ、先だつものは涙である。それにつけても安寿姫が、この世に生きながらえておられれば、

思い悩み苦しむことなど何もなかったのにと、さめざめとお泣きになる。

梅津の院もお聖も、伊勢の小萩を初めとして、「お嘆きはもつとですが、しかしながら、嘆いても叶わぬことですから、どうか諦めなさいませ」といつて、蓬萊飾り（不老長寿をねがう飾り物）を飾り立て、お喜びの酒盛りは、三日三晩つづいたとか。

杯さかずきの儀も納まって、姉上の菩提のためにいうことで、膚の守りの地藏菩薩を、丹後の国に安置して、御堂一字を建立なさる。今の世に至るまで、金焼地藏菩薩として、人々は厚く崇拜している。

そののち厨子王殿、国へ帰ろうとおっしゃって、父上や母上を、網代の輿にお乗せして、さらに命の恩人のお聖様、伊勢の小萩もそれぞれに輿なぐさや輶なぐさ（長柄）に乗せられて、ご自身は御馬にお乗りになつて、十万余騎を引きつれて、陸奥をさしてお下りになる。

昔屋敷のあつた跡に、たくさんの屋敷を建て並べ、富と地位ある家として栄えなさる。昔の郎等どもも、我も我もと参上して、主君を守護なさる。古きより今もこれから末代も、めつたに例のない、ことの次第であつた。

（下巻おわり）